

2019年07月04日 3面

文字サイズ 小 中 大 [ブックマーク](#) [印刷](#) 

大林道路／積載量表示ダンプを現場に試行導入／作業効率15～20%向上



スケールダンプを使った切削オーバーレイ工の様子。右の作業員は緑色に表示されている重量を確認しながらオペレーターに積載の指示を出している

大林道路は大煌工業（埼玉県川口市、山下将弘代表取締役）、極東開発工業（兵庫県西宮市、高橋和也社長）と共同開発した積載量の計測・表示が可能なダンプトラックを、自社施工する現場に試行導入した。積載量を正確に計測できるようになったことで、作業効率が従来比で15～20%ほど向上したという。8月末に販売開始し、年間300台の販売を目指す。

3社で共同開発した「スケールダンプ」は荷台下に計量装置、荷台前方と車内に表示計を搭載した10トンダンプ。ドライバーや積み込みの作業員が車内外の重量表示計で積載量を確認できるため、過積載を防止する。積載能力をフル活用した運用が可能になり、運搬効率の向上や、余剰な運行台数の削減が実現できる。

荷台下の計量装置で自重計よりも高精度に計量できる点が特長。時速5～8キロの低速で走行し、作業をしながらでも計測できる。10トン車であれば既存の車両にも装置の後付けが可能だ。

スケールダンプを6月19、20日の2日間導入したのは、東京都港区の「都道新橋日の出頭線（都道481号線）横断歩道移設工事」（NREG東芝不動産発注）の現場。切削オーバーレイ工で専用機械によって既設舗装の表層を剥がす際、走行しながら砕いた表層をスケールダンプに積載した。作業員は表示計の数値が予定している積載量に達するのを確認し、切削機械のオペレーターに積載をやめる合図を出した。

大煌工業の山下代表取締役によると「従来は積載オーバーしないように、積載上限よりも1.5～2トン下回る量を積載する傾向があった」という。スケールダンプで高精度に計量できるようになったことで、「上限の10トンまで積載できるようになり、ダンプの運行台数も15～20%程度削減できるようになる」と試算する。

人員削減の効果も見込まれる。現行の方法では積載量の目安とする目的で道路にマーキングしている。特に高速道路の現場だと、マーキングの範囲が膨大になってしまうことが課題だった。濱田道博大林道路代表取締役副社長は「スケールダンプを導入すればマーキングの作業が不要になり、その分人員や作業時間を削減できる」と見込む。

閉じる

記事ID：3201907040307

Copyright(C) 日刊建設工業新聞 記事の無断転用を禁じます